機関紙『東京ＹＷＣＡ』NO.815　（2025 年 7 月号）

若い女性へのメッセージ
「隣人と共にいきるという生き方」

公文　和子（シロアムの園代表）

最も大切な教えは「神様を愛すること」「隣人を愛すること」とイエス様はおっしゃっています。私はそれを幼いころから聞いていましたが、「愛することのアクション」とは何か、「隣人」とはいったい誰なのか、疑問をもったまま成長していきました。幼いころの「隣人」は、家族、近所の人、学校の友達や先生など、限られていた人間関係でも、成長と共に社会は広がります。四半世紀前に日本を出て、世界の様々な人たちと直接的・間接的に出会うとますます広がり、この「隣人」をみんな愛して、アクションを起こせるのか、そんな疑問をもつようになりました。日本の中にもたくさん困っている人たちがいますが、世界にも尊厳が守られず、日々の暮らしを継続することすら困難な人たちがたくさんいます。

そのような中で自分が共に生きていくべき「隣人」を探し求めて歩んできましたが、2002 年にケニアに来て 10 年近く経った時、障がいのある子どもたちと出会いました。差別偏見の中で必要な医療や教育を受けることもできず、経済的困難・家庭崩壊などで必要なケアを受けていない子どもたちは、そのような状況だからこそ他者との関係の中で喜びを感じ、素晴らしい笑顔を見せる。その笑顔と出会って、この子たちが自分が共に生きていくべき「隣人＝友」であると確信しました。

そうして 2015 年に始まったのが「シロアムの園」です。障がいのある子どもたち、そのご家族、スタッフ、地域の人たち、みんなが一人ひとりのいのちの意味を見いだし、愛され、愛する中で居場所を見いだしていくコミュニティを目指しています。子どもたちは医療・リハビリ・教育などのサービスを通して、またご家族への支援を通して、一人ひとりが神様に愛され賜物をいただいている存在であることを意識し、人との交わりの中に喜びを感じるようになっていきます。

R という 8 歳の女の子がいます。3 歳で初めてシロアムの園に来た時、体重は 6 kg、表情も乏しく、泣くこともあまりありませんでした。手足は硬直して、ほとんど動かしません。ご飯を食べるのがとても大変で、

スプーン一口にとても時間がかかり、食べてもむせて吐いたりしていました。Rのご家族もRを好きなのに、どうしたらよいかわからず途方に暮れていました。シロアムの園ではRがごはんをおいしく食べて体重が増加し、笑うのが難しくても、少しでも気持ちを表現できるようになればよいと考えました。けれどもRは依然として表情もはっきりせず、ご飯も少量しか食べられず、誤嚥性肺炎を繰り返し、6歳で体重は5.5kgに減少、とうとうご飯を全く食べられなくなってしまいました。ケニアの社会で管から栄養をとることは受け入れられず、差別や偏見を増長する懸念がありましたが、命にかかわることでしたので、鼻から入れた管から流動食を注入する食事に変更しました。そうしたところ、ご飯を食べる苦痛がなくなり、とてもおだやかで、クラスでも先生のお話を聞いたり、周りの子どもたちをきょろきょろ見たり、驚いたりするようになりました。体重も9kgまで増え、病気になることも少なくなりました。

このRのいのちを豊かにしたのは、科学的には「経管栄養」なのかもしれません。しかし本当はRに生きてもらいたいと心から願ってきた家族や、Rを大好きで彼女の幸せのために何をしたらよいかいつも模索してきたスタッフたちの愛が、Rの人生を大きく変えたのだと思います。小さいことでも大きな愛をもって行うことで「いのち」が変わる。たくさんの出会いの中で自分に与えられた隣人と共に生き、それによって私たち自身のいのちが豊かになる喜びを、皆さんも周りの人たちと感じてみませんか？